

農泊のススメ

観光の楽しみ方が変化するなかで、「農泊」というコンセプトへの関心が高まっている。農山漁村に宿泊し、滞在中に地域資源を活用した食事や体験等を楽しむ「農山漁村滞在型旅行」のことである。観光地を巡るだけの旅では味わえない、暮らしの雰囲気に触れる時間に価値を見いだそうとしている点に特徴がある。

三重県でも地域の特色を生かした農泊の取り組みが少しずつ広がっている。大紀町では世界遺産である熊野古道伊勢路を巡りながら、古道沿いの体験民宿で地域に伝わる旬の食を満喫する「熊野古道伊勢路～巡礼・食旅～」が展開されている。歩くことで自然をじっくり感じ、食を通して地域の文化に触れる構成であり、土地の魅力を素直に体験できる点が特徴である。

また、榎原温泉（津市）では温泉で体を癒やしながら軽めの農作業を体験する滞在型の取り組みが進んでいる。土に触れたり、旬の野菜を収穫したりする体験を通して、心身のリフレッシュを図る試みである。温泉池と農村風景をあわせ持つ地域性を生かした、三重らしい体験価値の提供と言えるだろう。

県は政策的にこうした動きを後押ししている。例えば、「農泊の推進、レベルアップ事業（令和7年度）」では県内の農泊事業者等を対象に、既存の体験メニューの見直しや新しいプログラムの開発支援、地域の担い手どうしの連携づくりが実施され、農泊の育成・普及に向けた環境整備が進められている。農泊は地域の自然や食、暮らしといった、一見素朴に見えるが、「地方でしか提供できない貴重な体験」を積極的に提供していこうとするコンセプトである。今後、この動きを確かな成果に結びつけていくためには、豊かな自然や文化といった「地の利」を生かし、付加価値性の高い観光商品として磨き込み、土地のストーリーを旅行者が理解し、サービスとして消費可能な状態にすることが欠かせない。

三重県の持つ農泊のポテンシャルの開放に向けた取り組みの動向から目が離せない。

（地域共創事業部 受託・調査グループ 主任研究員 中村 哲史）

毎日新聞「三重～る経済」 2025年12月8日